

からの研究を展開できるように思われます。

地理学を志す先生方、学生の方々、ちょっと一服し

て、疾病の方にも目を向けて頂けないでしょうか。

(東大医科研)

創造性について

高 阪 宏 行

日本人は創造性がないとよく言われているが、ほんとうなのだろうか。私は数年前にイギリスへ留学して、この創造性の問題についていくつかの貴重な体験をした。

創造性を発揮するには、誰もやっていない研究を行えばよいのである。正確に言うと、誰もやっていない新しいものに取りかかることを研究するというのである。したがって、創造性なくして研究は行えない。イギリスの研究者は、この点を非常に強く意識しているのである。そこで研究者は、研究を行うため、まず自分のセールスポイントを作る。これだけは誰よりも自分がよくできるという能力を身につけるのである。大学在学中、学生は主専攻と副専攻をもっている。主専攻として地理、副専攻として経済をとると、この副専攻がセールスポイントとして大いに役立つのである。逆に、主専攻として数学、副専攻として地理をとり、地理研究者になった例も少なくない。いずれにせよ、主専攻——副専攻制度が、研究者の視野を広くするとともに、自分しかできないセールスポイントを生む源になっているように思われる。

セールスポイントをもった研究者は、それを駆使して新しい研究を行う。例えば、それを使って新しい視点を開き新たな発見をすとか、従来からの問題点を解決すとかいうふうなのである。その際、自分が得意とする関連分野の成果を導入することはもちろんであるが、それよりも重要なことは、従来の考え方にとらわれず自分の頭で考えることである。考え方に柔軟性をもたせ、大胆に発想することが必要である。創造性への基本姿勢はやはりここにある。正しく、「想像力は知識よりもっと大切である」(アインシュタイン)。この段階で研究者のセンスや研究能力が問われるのであるが、私の見たLeeds大学の研究者も大変苦勞していることを知った。考え方がまとまると、口頭発表して研究者の間でそれが正しいか、より適切なものがないかどうか討

論する。さらに、大学の研究紀要に発表して、文の形に直して関連分野の研究者に配布して検討を加える。このようにして、新しい考えは、何回も練り直されて、じっくり時間をかけて、育てあげられるのである。要するに、創造性を発揮するには、柔軟な発想とたゆまない向上心、そして豊富な時間が必要なのである。

このようにして創造的研究を行う研究者は、最終的にどのような方向に進んでいくのであろうか。それは、研究者独自の地理学の世界を創ることにある。創造的研究とは、研究者個人の主観、体験、価値観などに基づくものであり、個性に富んでいる。創造的研究を積み上げていくと、そこに独自の地理の世界が構築されていく。世界の一流の研究者は、それぞれ独自の地理の世界をもっている。イギリスでは、Wilsonの空間的相互作用理論、Smithの社会福祉の地理、Bennettの公共投資の地理、Harveyのマルクス主義地理学などである。このような個性的な地理は相互にぶつかり合い、現代の地理学を形成していると同時に、歴史の試練を経るのである。

以上、イギリスで私が見聞きしたことをまとめてみたが、最後にもう一度、日本人の創造性の問題に戻ろう。私の考えでは、日本人に創造性がないのではなく、それを発揮できるような社会的背景、教育の体制が整っていないのである。改善すべき点の一つは、大学教育であり、知識習得の教育から創造的教育へと転換する必要がある。独自の学問の世界は、20代~30代に創られることが多いので、大学教育はそのジャンピングボードとしての役割を果たすべきである。日本が経済大国になった今日、世界の研究者は、日本からの創造的研究を大きな期待を込めて待ち望んでいる。その期待を裏切らないよう、われわれは最善をつくすべき時なのである。

(日本大学)